

## 『心に響く小さな5つの物語』より抜粋(実話)

致知出版社 代表取締役社長 藤尾 秀 昭

先生が5年生の担任になった時、一人服装が不潔で、だらしなく、どうしても好きになれない少年がいた。

中間記録に先生は、少年の悪いところばかりを記入するようになっていた。

ある時、少年の1年生の記録が目にとまった。

「朗らかで、友達が好きで、人にも親切。勉強も良くでき、将来が楽しみ。」とある。

間違いだ。他の子の記録に違いない。先生はそう思った。

2年生になると、「母親が病気で世話をしなければならず、時々遅刻する。」と書かれていた。

3年生では、「母親の病気が悪くなり、疲れていて、教室で居眠りする。」

後半の記録には、「母親が死亡。希望を失い、悲しんでいる。」とあり、4年生になると「父は生きる意欲を失い、アルコール依存症となり、子どもに暴力を振るう。」

先生の胸に激しい痛みが走った。

ダメと決め付けていた子が、突然悲しみを生き抜いている生身の人間として、自分の前に立ち現れてきたのだ。

放課後、先生は少年に声をかけた。

「先生は夕方まで教室で仕事をするから、あなたも勉強していかない？分からないところは教えてあげるから。」

少年は初めて笑顔をみせた。

それから毎日、少年は教室の自分の机で予習復習を熱心に続けた。

授業で、少年が初めて手を上げたとき、先生に大きな喜びが沸き起こった。

少年は自信を持ち始めていた。

クリスマスの午後だった。少年が小さな包みを先生の胸に押しつけてきた。

後であけてみると、香水の瓶だった。

亡くなったお母さんが使っていた物に違いない。

先生はその一滴をつけ、夕暮れに少年の家を訪ねた。

雑然とした部屋で独り本を読んでいた少年は、気がつくと飛んできて、先生の胸に顔を埋めて叫んだ。「ああ、お母さんの匂い！今日は素敵なクリスマスだ。」

6年生では少年の担任ではなくなった。

卒業の時、先生に少年から一枚のカードが届いた。

「先生は僕のお母さんのようです。そして今まで出会った中で、一番素晴らしい先生でした。」

それから6年、またカードが届いた。

「明日は高校の卒業式です。僕は5年生で先生に担当してもらって、とても幸せでした。おかげで奨学金をもらって、医学部に進学することができます。」

10年を経て、またカードが来た。

そこには先生に出会えたことへの感謝と、父親に叩かれた体験があるから、患者の痛みが分かる医者になれると記され、こう締めくくられていた。

「僕はよく5年生の時の先生を思い出します。

あのまま駄目になってしまう僕を救って下さった先生を神様のように感じます。

医者になった僕にとって、最高の先生は5年生の時に担任して下さった先生です。」

そして1年。

届いたカードは、結婚式の招待状だった。

「母の席に座って下さい。」と一行、書き添えられていた。

### 【校長雑感】

よく“〇〇冥利に尽きる”という言葉を目にしますが、今回のお話は、まさに教師冥利に尽きる物語だと思います。

教師という職業は、子どもの人格形成に大きく関わる仕事です。

それだけに一人ひとりと誠実に向き合い、信頼関係を築いていかなければなりません。

高校生活は、長い人生のうちのたった3年間でしかありません。

“一期一会”・・・卒業したら、もう二度と会うことがないかもしれない生徒達。

私自身、教壇に立って教えることはかないませんが、この話のように、あの校長に出会えて良かったと、どこかで思ってもらえるような生き方をしていきたいと考えています。